

---

# 海と恋人

御器

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

海と恋人

### 【Nコード】

N5584M

### 【作者名】

御器

### 【あらすじ】

ロマンティストな恋人と、衝動的な行動。

雨に打たれたままの鞆を放り出して、登喜子はベッドに飛び込んだ。硬いマットで全身を強打し、堪らず呻く。けれど、それよりも今はただ眠かった。重い瞼を閉じると、心が白い波に漂うかのようにはゆらゆらと安らぐ。意識が溶けていくようで、その心地良さに登喜子はすぐに眠りに落ちた。

東京湾に昭夫を沈めたのは、意図的にやったことではなかった。東京湾は汚れているね。そうね。夕日はきれいだね。そうね。おかげで東京湾も少しばかりマシに見えるね。そうね。恋人らしく腕を組み、防波堤に二人佇んでうっとり目を細めていたときのことだ。昭夫が急にこんなことを言い出した。僕はいつか海に解けてみたいんだ。心を許した者にのみ伝えられる、少しばかり恥ずかしい昭夫の夢。普通の恋人ならば、まあロマンティストなのね、という返答が期待できるだろう。けれど、登喜子は気付いたときには、恋人を海へ突き落としていた。どうしてか自分でも分からないまま、ただ微笑んで。突然足場を失った昭夫は当然のことながら、何が何やらといった顔で海へ沈んでいった。自分のしたことが信じられず茫然自失としていた登喜子は、我に返ると素早く海を覗き込んだ。廃棄物や油で汚れた海では、その中を窺い知ることにはできなかった。でも、その内自力で上がってくるだろう、子供ではあるまいし。心配しつつも、登喜子はそう考えて波が押し寄せる防波堤間際の海をじっと見つめた。けれど、波が寄せる以外の飛沫が立つことはとうとうなかった。

警察へ連絡しようかとも思った。恋人が海へ落ちてしまって、上がってこないんです。それはいかにも間抜けなように思われた。だから、登喜子は警察へは連絡しなかった。それに、登喜子はまた、こんなことを考えてもいた。海水は、浄化されたのち水道水として一般家庭に行き渡る。あのまま海に漂っていれば、いつか昭夫は海

に解けるだろう。そんな昭夫をこの体に取り入れる、それはとても素敵なことのように思われた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5584m/>

---

海と恋人

2011年10月7日01時15分発行